

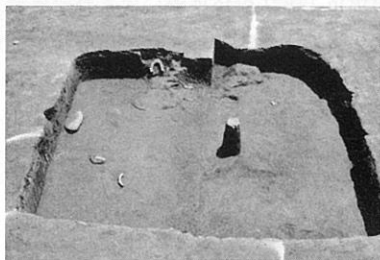
長野県埋蔵文化財ニュース

No. 10

1984. 10. 20

(財)長野県埋蔵文化財センター

松塩 筑調査事務所
〒399-07 塩尻市広丘高出1977
TEL 0263-54-2150



南栗北栗遺跡

—松本市島立—

写真左上 第16号住居址

右下 鋤先出土状況 (松本市教育委員会提供)

松本市教育委員会 高 桑 俊 雄

本遺跡は松本市の西部、島立の南栗、北栗地籍一帯に存在する。島立地区は昨年度から県営ほ場整備事業が開始されており、今回は工事により深く削平される範囲を調査することとし6月1日から実施している。

調査対象地区は奈良井川に架かる島立橋、月見橋間の左岸段丘上に当たり、標高は597m、面積は約2万㎡である。昨年度奈良時代～室町時代の住居址22軒、完形の佐波里鏡等を出土した栗林神社北側地区はここより南西約500mにある。

一帯は長い間水田であったため土層はほぼ一様であり、基本的には耕作土(水田)床土-溶脱層-黄褐色土層(検出面)と把握、検出面までは50～60cmである。ただ灰色土を落とす中世の遺構と、平安時代末期の住居址は溶脱層中でも容易に検出できる。

今迄のところ、古墳時代後期～中世の住居址約90、建物址11、一定地区に集中する中世墓壇、倉庫址約30古墳時代以前のものも含む水路址8、他に土壇、ピッ

ト等は500以上を検出した。遺物は該期の他遺跡と比較すると若干少ないようであり、土器の他には金環、帯金具2点、鋤頭等が出土している。

なお近隣の御乳神社周辺からも奈良～平安時代の土器がかなり多量に出土したと聞いており、この地区一帯がかなり大規模で長期にわたった集落と予想することができる。その背景にあった経済的基盤を考える時ちょうど島立の条里遺構はこの北西地区にあると言われており、今秋以降調査を予定している。

ところで当遺跡内においては7月に県文化課の主催で地下レーダー、電気探査、磁気探査等の科学探査方法を実験的に行い一応の結果が出たところで奈良国立文化財研究所の田中琢氏を招いて検討会が開かれた。詳しくは触れないが、総括で田中氏は窯址についての磁気探査はかなり効果はあるが、一般の遺跡への科学探査はいずれもまだ緒についたばかりであり、実用化にはまだ問題があると述べておられた。

発掘調査紹介

——中央道長野線発掘調査速報——

岡谷市中島A・B遺跡(3)

—岡谷市今井—

昨年度より始められた中島A遺跡の調査は、湧水の噴出が著しい低湿地という悪条件のため、今年度まで持ち越されることになった。

基本層序に関しては前回(No.6)で触れたとおりである。今年度は、泥炭または植物遺体を多量に包含するⅣa・b層、および砂礫の混じるⅣc層、さらに包含層最下で粘土質のⅤ層に重点をおいて調査が行われた。このうち特にⅣb層からの遺物が多く、弥生時代中期初頭の土器片が目立った。また多量の植物遺体が検出され、なかでもクルミの種子が集中出土するという所見を新たに得ることもできた。周辺で検出された立木や倒木の樹種とこれら種子との相関性を追究するなかから、遺構の検出を望みにくい当遺跡の性格を把握していきたいと、今後の鑑定に寄せる期待は大きい。続くⅣc層では縄文時代晩期水Ⅰ式の土器が、Ⅴ層からは初めて縄文時代中期曾利式をはじめ前期末十三菩提式の一括土器が出土するなど、層位的に幅広い年代にわたる当遺跡での生活の痕跡を知り得た。



中島A遺跡縄文時代晩期の土器

本遺跡は、くり返し述べるように、自然遺体の豊富な資料が、しかも層位的に出土するという諏訪地方では極めてまれな遺跡であった。したがってそこから得られるであろう情報を少しでも多く得るため、先の樹種鑑定のほかに、珪藻分析の依頼、また、層序資料をより客観的に伝えるため、奈文研の研修を受けた研究員自らの手による土層剝離等を行った。

(調査研究員 三上徹也)

中島B遺跡は、前年調査され、ポイント・コア、ポイント・フレイク等の遺物が総計5000点以上出土した。今年度は、前年の調査区域の南と東にそれぞれ隣接する区域、合わせて1590㎡を調査の対象とした。

南側に隣接する区域は塚間川左岸の水田で、耕土下に腐植しきらない植物を多量に含む黒色土(Ⅲ層)と灰褐色砂礫(Ⅳ層)が約1mの厚さをもって堆積している。遺物はこの黒色土と灰褐色砂礫に含まれ、黒曜石チップ、弥生時代後期土器片、平安時代土器片が混在して出土している。



中島B遺跡Ⅳ層遺物出土状況

東に隣接する区域は前年の調査で、微高地の東側の斜面になるとみられていたが、今年度の調査でそれが確かめられた。そして、その斜面上にも黒曜石フレイク、チップのブロックが広がっていることが明らかになり、隆起線文土器の出土もみられた。

層序は、前年調査の区分に対応させ、Ⅰ—耕土、Ⅳ—黄褐色砂礫層、Ⅴa—褐色土層、Ⅴb—明黄褐色砂礫土層、Ⅵ最上a—暗褐色粘質土層、Ⅵ最上b—黄褐色砂礫土層、Ⅵ最上c—暗灰色粘質土層、Ⅵ上—明黄褐色粘質土層、Ⅵ下—明黄褐色粘質砂礫土層、Ⅶ—青灰色粘質土層とした。このうち、遺物包含層はⅥ最上a～Ⅶで、黒曜石フレイク、チップ約340点、ポイント、コア等の石器20点余りが出土している。出土層位はⅥ最上c～Ⅵ上が最も多い。また、Ⅵ最上a～cにかけて日本で最古の土器群に属する隆起線文土器の破片が15片程出土している(ほぼ二個体に分れる)が、遺構はみられなかった。Ⅵ最上a～cでは、ポイント、コア等の石器も出土しており、それが隆起線文土器に伴うものかどうか今後の検討課題である。

なお、現在併行して遺物の水洗・注記・復元作業が進められており、その一部は去る7月22・29日に行われた現地説明会にて展示することができた。

(調査研究員 関 賢司)

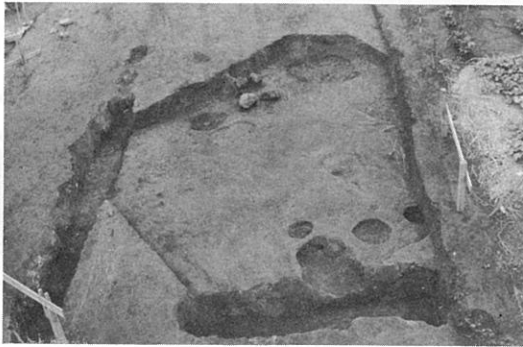
とよぐち

樋口遺跡

— 塩尻市長畝 —

樋口遺跡は塩尻市長畝地籍の東方に展開する放射状の丘陵地に所在し、栗木沢遺跡、ヨケ遺跡等と同様に小規模な谷地形の谷底部、及び丘陵上の小平坦面に立地する。調査した結果、丘陵上から竪穴住居址1軒が検出されたほか、時代、性格ともに不明の袋状の土壌1基が発見された。谷底部からは平安時代の土師器、灰釉陶器が多数出土したものの、明確な遺構は発見されなかった。

竪穴住居址は5m×5mの隅丸方形プランを呈すと考えられるが約5分の1が中央道用地外にかかってお



平安時代後期の住居址

り、一部が耕作（長芋）によって破壊されているため全体を把握することはできなかった。土師器・灰釉陶器・刀子・紡錘車等が出土したことから、平安時代後期のものと考えられる。土壌は開口部0.8m×0.5m、底部1.5m×1.2mの断面長靴状を呈しており底面は堅くしまっている。内部には黒色土がつまっていたが遺物の出土はなく、性格は不明である。

谷底部からは当初、石鏃・打製石斧・土師器等が表面採集されたため、縄文、平安の複合遺跡ではないかと思われたが、表土及び表土直下の黒色土層から、土師器・灰釉陶器等がかなりまとまって出土したものの縄文土器等はほとんど検出されず、該期の遺構も発見されなかった。平安期の遺構としては小規模な焼土のブロックが3か所ほどみつかったほか、時代・性格ともに不明な土壌が1基検出されたのみである。栗木沢遺跡等の例を想定すれば、遺構は表土直下に浅く存在していたため耕作等によって既に破壊されたとも考えられる。

(調査研究員 田中正治郎)

— 県内各地の発掘調査紹介 —

塩尻市堂の前遺跡

塩尻市教育委員会 鳥羽嘉彦

堂の前遺跡は、塩尻市大字長畝に所在し、市街地東方を北流する田川の支流、鋳物師屋川が形成した小支谷の右岸、すなわち南向きの緩斜面上に立地する。

塩尻東地区の県営ほ場整備事業は昭和58年度から開始され、2年次の今年度は長畝・東山地籍の3遺跡が対象地域にかかったため、工事に先立ち緊急発掘調査が実施された。このうち堂の前遺跡は5月16日～6月27日の延41日間にわたり調査が実施され、調査面積は1,200㎡である。

検出された遺構は、竪穴住居址12軒、小竪穴33基、集石6基および中世遺構である。住居址は縄文早期7縄文中期前葉3、平安時代1、時代不詳1という内訳であるが、なかでも縄文早期の住居址が7軒まとまって検出されたことは注目に値する。しかもプランが不明なものは5号住のみであり、残りは全て全周もしくは半周以上の壁が確認された。この中で7号住（写真奥）は、12×3mを測る大型住居で、検出時には複数住居址の重複かと考えられたが、周溝の存在により全体が把握された。床面は同じく早期の3号住および5号住直上に厚さ5cmの貼り床をもって構築されておりよく踏み固められたものである。主柱穴は見当たらないが床面上の多数の小ピット群がこれに当たると考えられる。同様の柱穴形態は8号住（円形プラン、写真前）にも顕著にみられる。伴出した土器は押型文・沈線文・貝殻条痕文がみられ早期末から前期初頭に位置



縄文時代早期の住居址群

されるものである。これらは当地方では過去に出土例が少ないものであり、一括資料として貴重なものとなろう。また同時代のものと思われる小竪穴には、陥し穴、貯蔵穴などの形態をもつものがあり、集落の性格を把握する上で重要な手掛りとなろう。

中世遺構は緩斜面を落差70cm、長さ20cm以上の掘り込みによって平坦面を設けているものである。平坦面には3間×3間の掘立柱建物址の柱穴が2軒分検出されたほか、五輪塔、角釘などが出土している。遺跡名にもみられるように以前この付近には現在の永福寺の前身にあたる長福寺という寺があったといわれており、その施設の一部である可能性が高い。遺物としては土師質のかわらけ、瀬戸製の瓶子、常滑系の甕などが出土している。また柱穴の周辺からは火葬墓が3基発見され、多量の炭化材と人骨、古銭が伴出している。

報告書は他の2遺跡を合わせ今年度中に刊行される。

茅野市高風呂遺跡

茅野市教育委員会

尖石考古館学芸員 守矢昌文

高風呂遺跡は、茅野市湯川地籍北西側、霧ヶ峰山塊より延びる尾根状の台地に占地し、標高は965mである。

県営ほ場整備事業に伴い昭和59年5月28日から8月10日まで約2か月間にわたって調査が実施された。

調査の結果縄文時代早期末から中期末にわたる遺構が検出された。その内訳は住居址49軒、土城38基、方形配列土城1基、集石6基、黒曜石集中区4か所で、縄文前期初頭から中葉のものが主体を占める。これらの遺構は台地の縁辺に帯状に形成されており、土城は住居と同様な範囲に構築されている。また、集石は台



遺構の重複状況

地の先端部に形成された小規模な谷部に沿う形で検出され、礫内より土器片、石皿等が混然とした状態で出土している。住居址は伴出土器より縄文早期末葉3軒、前期初頭5軒、前期中葉13軒、前期末葉4軒、中期初頭1軒、前期中葉8軒、中期末葉2軒、不明13軒に分けられる。また、住居址群の他に土器廃棄の範囲も確認され、検出された土器等から前期初頭に位置付けられるものである。住居址の時期的変遷を視ると、前期のものが外縁に位置し中期になるにつれ台地内部に移行してくる内向現象が認められる。遺構の中で特筆されるものとし黒曜石集中区、褐鉄鉱集中区がある。黒曜石集中区は屋外、屋内のものに分かれ大粒の黒曜石塊をピット内に充填した形で検出されている。褐鉄鉱集中区は第28号住居址内より検出された。加熱を受け赤変現象を起こしたものが、ビニール袋1杯分(約7kg)集中して検出されている。

遺物については現在整理中で詳細については述べられないが、土器は縄文早期末から前期初頭にわたるものがまとまって出土している。石器は黒曜石製のものが主体を占め、打製石斧などは概して少ない。また、石皿が多量に出土しており、赤色塗料が付着した例などもある。

以上の様に本遺跡の調査結果は当初の予想を上回り、特に前期集落を看取できたことは大きな成果であった。今後前期土器の分析を進め住居址の時間的変遷における占地の問題等検討が必要である。

長野市旭町遺跡の調査

長野市教育委員会

長野市立博物館学芸員 青木和明

旭町遺跡は長野市街西部の旭町及び長門町に所在し、県立長野図書館跡地への市立図書館建設に伴い、市教育委員会・遺跡調査会が発掘調査を実施した。

調査期間は昭和59年4月15日より5月5日までであり、各時代にわたる遺構・遺物を検出するに至った。

時代別遺構の内訳は次のとおりである。

- 縄文中期末葉前後 竪穴住居1、敷石住居1、土城3、
- 古墳時代中期 竪穴住居2
- 平安時代以降 竪穴住居2、柱穴群

遺物は包含層中から縄文中期所産の土器・石器が多量に出土し、他を圧倒している。中でも土城出土のタ

カラ貝様土製品、打製石斧を埋納した伏甕の検出が特筆され、市内では資料の僅少な同期にあって、好資料が提示されることとなった。

長野市街西部域は、裾花川に沿い発達したいくつかの段丘地形が顕著であり、旭町遺跡もそのうちの一段丘上に立地している。明治期以来の市街化により現状での遺跡確認が困難となっているが、近接して下段に県町遺跡が存在し、上段にも遺物出土が伝えられおり、広範囲に展開する遺跡群を想定することができよう。



旭町遺跡の遺構群

取り壊しとなった旧県立図書館建物は、中央道調査団本部を経て埋文センター長野事務所として利用されてきたことは記憶に新しい。その跡地において埋蔵文化財の確認に及んだことは因縁めいたものすら感じられるが、度重なる造成・建設を経た市街地ながら、比較的良好な状態で遺跡が遺存したことは予想外の結果であった。今後の同地域での埋文保護姿勢には、新たな視点が必要となったと言える。

付記、遺跡名は当初県町遺跡としていたが、旭町遺跡として把握することが妥当となった。今後は調査地を旭町遺跡の範囲内に含めるものとする。

佐久市いもじや鑄師屋遺跡

佐久市教育委員会 小山 岳夫

鑄師屋遺跡は佐久市小田井に所在し、県営ほ場整備事業によって破壊が余儀なくされるため、緊急に発掘調査を行い記録保存することとなった。

遺跡は濁川流路の北岸、佐久平に特有な田切地形の

微高地上（標高760m前後）に占地している。一見、平坦な地形であるが、旧状は細かい湿地帯が樹枝状に入り組んで微高地を分断していることがトレンチ確認によって明らかになった。

遺構はこの微高地の北西部に集中し、奈良～平安時代の竪穴住居址4軒、竪穴状遺構6基、溝状遺構2基、土壇・ピット等100余基が検出された。

竪穴住居址は調査区の北西部に集中し、いずれも4m以内の規模を有する。また、カマドは北壁中央に、柱穴は東・西壁に中央に各1個有するのが一般的である。

竪穴状遺構は不整な長方形か、円形を呈し、割合堅固に踏みしめられた床面を有するものの、火処が全くなく、柱穴も皆無か位置関係が極めて不規則な遺構に対して仮称した。この竪穴状遺構は調査区内の西半部に広く点在し、遺物は極めて少なく、そのほとんどが須恵器である。その機能については全く不明と言わねばならないが、当遺跡の性格を考える上で重要な位置を占められると思われる。類例を御存知の方は御教示を願いたい。

これらの遺構内からは土師器・須恵器片のほか縄文時代後期の土器片、灰釉陶器片、打製石斧、馬骨片が出土している。総じて遺物の出土量は少なく、1遺構内から小片が3点しか出土しなかった例もある。

以上が鑄師屋遺跡の概略である。奈良～平安時代の遺構は、更に20～30m北方の微高地の先端部まで存在すると考えられ、集落規模は更に拡大されることが予想される。したがって、集落構造の全容については、来年度予定されている微高地先端部の調査によって明確化されるであろう。また、本遺跡出土の奈良～平安時代の土器は、佐久地方で同期の資料が著しく増加している現在、編年を試みる上で良好な資料を提示したと言えよう。最後に同じ遺跡群中には、本年度御代田町教委で調査された野火付遺跡があり、6頭分の馬骨の出土が注目を集めた。本遺跡でも少量ながら馬骨片が検出されたことを勘案すると、同遺跡群が東山道筋の古代牧に関連する重要な地域にあったことを想起させる。

市町村だより(6)

大町市における埋蔵文化財保護行政の現状

大町市教育委員会社会教育係

大町市における遺跡数は、125か所(旧石器1、縄文53、弥生5、古墳17、古墳～平安14、中近世、城址及び居館址35)が確認、周知されている。

大町市においての埋蔵文化財保護行政は、教育委員会社会教育係が行っており、体制は係長1名、係員2名で、市が関係する青少年、成人教育、文化、芸術活動等に一括対処している。その中で、埋蔵文化財関係は、係員1名と嘱託1名が当たっているが、係員は他の社会教育係実施事業と兼務しており、現状では保護行政が円滑に機能しているとは言いがたい。

大町市においては、上原遺跡調査以来、数件の発掘が行われたのみであったが、昭和52年以降、圃場整備が始まると同時に大規模発掘が始まり、発掘面積も徐々に増加した。圃場整備事業に伴う遺跡調査は、県内どの市町村でも同様と考えられるが、事業が広大な面的工事で、ほとんど単年度事業であるため、調査期間に制約があり、保護にとっては困難な条件が多い。昭和54、55、56年に三次に分けて発掘調査された借馬遺跡は、大町市内においても大規模な遺跡であった。3年間で約30,000㎡を発掘調査したが、それも予算、調査期間など充分な対応ができず、市の編成した体制(調査団)でも弱体であり対応しきれず、借馬遺跡全体の8分の1程度であり、集落の中心的な位置部分を発掘したにすぎない悲惨な状況であった。しかし、昭和58年に調査した五十畑遺跡は15,000㎡を発掘し、埋もれている集落址の破壊される部分のほぼすべてを明

らかにすることができたのは、幸いなことであった。だが、大規模発掘に伴う遺物整理は、担当している2人では処理しきれず、山積みとなり、報告書も内容のないものとなってしまっている。

近年、開発の進行に伴い小規模な遺跡破壊が懸念され、その対応及び対策にも四苦八苦している。このため、当市においても来年度から遺跡の位置、範囲を周知するために遺跡詳細分布調査を計画している。

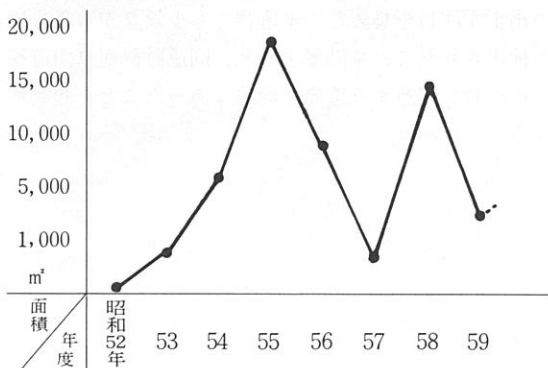
埋蔵文化財保護は遺跡が地下にあることから開発側との間に見えない壁がある。しかし、地域住民の文化財として保護しなければならない。そのためには、開発側の理解と住民の埋蔵文化財に対する意識を高めることが必要であり、そのための広報活動も必要であろう。



新郷古墳小学生見学会風景

大町市では、地域住民の埋蔵文化財の意識向上のため、発掘調査時には現地説明会を行い、昭和57年は成人大学講座の一環として、昭和58、59年は小・中学生を対象とした青少年地域活動の一環として、講座及び教室を開催している。また、山岳博物館では、企画展として、昭和58年大町市における遺跡展、59年大町市における古墓展(古墳及び墓について)を開催し、市民の理解を深めようと努めている。

いずれにしても、大町市の埋蔵文化財保護行政は、不十分な点が多く、穴だらけで、問題は山積みの現状であるが、今後とも根気強く対応してゆかなければならない。



大町市における緊急発掘調査推移

埋文施設紹介(8)



信濃町立野尻湖博物館

〔建物の概要〕 野尻湖博物館は1962(昭37)年以来22年間に野尻湖底で発掘されたナウマンゾウ化石とそれに伴う旧石器遺物等の貴重な資料を現地に永久的に保管し、広く一般の方々に公開するために昭和58、59年度にわたって信濃町が国・県の補助金をえて建設したものです。敷地面積2,132㎡、建築面積609㎡、延床面積1,236㎡で鉄筋コンクリート3階建てです。

2階が玄関になっており、ロビー・事務室・展示室(320㎡)等があります。3階には、映写室をかねた特別展示室(87㎡)、化石処理室等が、1階には収蔵庫(333㎡)作業室(液浸標本収蔵庫、101㎡)身障者用トイレ等があります。

〔展示〕 「ナウマンゾウの狩人を求めて」をテーマに、A・野尻湖人の世界、B・野尻湖5万年の歴史、C・楽しい野尻湖発掘、D・体験コーナーの4構成になっています。

Aコーナーでは、ナウマンゾウの実大復元像や骨格模型、化石の出土状況復元、石器の使用復元模型、ヴィーナス像(?)など約3万年前の資料を中心に用い、ナウマンゾウを狩りして暮らしていた旧石器人類(野尻湖人)の時代、生活を復元的に展示しています。

Bコーナーは、野尻湖ができてからの5万年間の歴史を、それぞれの年代(地層)の代表的な出土化石・遺物で説明した歴史的な展示です。ここでは、なまの資料を多くみてもらい、新しい成果があれば順次入れかえていくことをめざしています。

Cコーナーでは、22年間の発掘のあゆみや現在の発掘のやり方、方法、さらに参加の仕方を紹介しています。

Dコーナーでは、実物のナウマンゾウ化石にさわったり、顕微鏡で花粉やナウマンゾウの化石を見れるようになっています。

野尻湖博物館では、全体として約4万年前から現在までの野尻湖周辺における自然と人類とのかかわり合いをとおして、きびしい氷河時代を生きぬいた私たちの祖先の暮らしについて深い認識と理解を得られるよう配慮しました。

〔収蔵・保管〕 野尻湖発掘で出土した約3万7000点(第8次発掘までのもの)の化石・植物のほか、周辺地域の地質、現生生物(植物・昆虫・動物)、考古資料の収蔵をはじめています。

考古資料としては、杉久保・仲町・照月台・向新田・清明台・狐久保遺跡等の旧石器を中心に信濃町の出土遺物を収蔵しており、順次展示もおこなっています。

また、骨製遺物や植物遺体の保存処理もおこなっています。

〔特別展〕 来年度より年1回、考古学・地質学・生物学等に関連した内容で特別展を計画しています。

〔参考資料〕 当館の展示説明書は現在編集中です。野尻湖発掘関係のものでは、第8次発掘までの成果をとりあつかった「野尻湖の発掘・3」、「野尻湖の発掘写真集・2」をはじめ出版物を多数とりあついています。

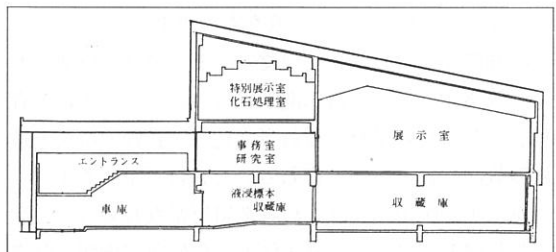
所在地 〒389-13 上水内郡信濃町野尻287-5
(02625-8-2090)

休館日 4～6、9、10月の各月末日(休日の時は翌日)、12月～3月19日

入館料 一般(含高校生) 300円、小・中学生 200円、団体一般270円、高校生200円、小・中学生170円

交通 信越線黒姫駅より野尻湖行バス終点下車(約10分)

備考 冬期休館中でも事前に申込みがあれば入館できます。



博物館横断面図

調査報告書の紹介

- ◇**八幡添遺跡** 長野県上高井郡高山村四ツ屋遺跡群
昭和59年3月20日発行 高山村教育委員会 (02624-5-1100) 縄文中期住居13・炉4・土壇4・集石5
(B5横組 本文63頁 図版21頁)
- ◇**竹之城原・浄永坊・浦谷B遺跡** 望月町文化財調査報告書第13集 昭和59年3月20日発行 望月町教育委員会 (02675-3-2548) 縄文前・中期住居15・土壇92一竹之城原ほか (B5横組 本文図版とも236頁)
- ◇**栃原岩陰発掘調査報告書** 昭和59年3月31日発行 北相木村教育委員会 (0267-77-2111) 縄文早期炉跡2・配石状遺構2・焼土5 (B5横組 本文62頁 図版20頁)
- ◇**久保田** 長野県小諸市久保田遺跡発掘調査報告書 昭和59年3月31日発行 小諸市教育委員会 (02672-2-1700) 縄文～平安住居31・竪穴状遺構3・周溝墓3・組石4・集石1・溝状遺構2・土壇27 (B5横組 本文77頁 図版38頁)
- ◇**塚穴・鞍掛・天神遺跡** 昭和59年3月30日発行 東部町教育委員会 (0268-62-1111) 平安住居4・集石土壇2・土壇13・溝状址1一塚穴ほか (B5横組 本文76頁 図版16頁)
- ◇**稲羽北遺跡発掘調査報告書** 昭和59年3月25日発行 丸子町教育委員会 (0268-42-3100) 奈良～平安住居5・土壇墓2・土壇10・ピット群3 (B5横組 本文48頁 図版17頁)
- ◇**長門町中道** 長野県小県郡長門町中道遺跡緊急発掘調査報告書 昭和59年3月23日発行 長門町教育委員

会 (0268-68-2127) 縄文～古墳・中世住居及び建物址17・石列1・土壇65 (B5横組 本文114頁 図版24頁)

◇**恒川遺跡群** 昭和58年度範囲確認調査概報 昭和59年3月31日発行 飯田市教育委員会 (0265-22-4511) 弥生～近世住居9・溝址8・集石1・墓壇1・柱穴群1・土坑3 (B5横組 本文11頁 図版10頁)

◇**前田遺跡発掘調査報告書** 昭和59年3月20日発行 下伊那郡松川町教育委員会 (02653-6-2622) 縄文中期・近世住居15・配石1・小竪穴91・建物址4以上・特殊焼土竪穴址2・井戸1 (A4横組 本文41頁 図版27頁)

◇**五十畑(遺構編)** 長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 昭和59年3月31日発行 大町市教育委員会 (02612-2-0627) 奈良～平安住居77・竪穴2・建物址6・柱列状遺構5・墓壇2・小鍛冶遺構2・溝址3ほか (A4横組 本文193頁 図版70頁)

◇**松本市下神・町神遺跡緊急発掘調査報告書** 昭和59年3月31日発行 松本市教育委員会 (0263-34-3000) 奈良～平安住居79・建物址35・土壇48以上・溝25ほか (B5横組 本文144頁 図版37頁)

◇**松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書** 昭和59年3月31日発行 松本市教育委員会 奈良～中世住居22・建物址4・土壇19・溝5・墓址3・集石1ほか (B5横組 本文104頁 図版42頁)

◇**糠塚・柿沼東・大原・中島遺跡** 塩尻東地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 昭和59年3月20日発行 塩尻市教育委員会 (0263-52-0280) 縄文中期住居23・小竪穴130一柿沢東 (B5横組 本文152頁 図版10頁)

埋文だより

図書目録Ⅰ発刊 当センター蔵書の約4,800冊 (昭和59年2月現在) を収めた図書目録Ⅰができました。

B4版 245ページの立派なものです。

昭和57年4月設立の当埋文センターで調査研究のために収集してきた考古学関係をはじめとする書籍・資料、並びに長野県教育委員会文化課・長野県中央道遺跡調査団へ各方面から寄贈された書籍が中心です。

国立国会図書館をはじめ各都道府県教育委員会、埋蔵文化財センター (県立・法人)、公的研究機関、県考古学会等へ贈呈しております。

埋文活動状況 昭和59年度の調査は、岡谷市内に3遺跡、塩尻市内に9遺跡を対象面積78,330㎡でした。(埋文ニュースNo.9参照)

その後、岡谷市で1遺跡・膳棚B(白山)、塩尻市で1遺跡・青木沢東が追加されました。しかし、塩尻市内の吉田向井遺跡の調査が、本年度困難になったため、新たに松本市内神戸・上二子遺跡の調査を開始する予定です。調査が完了した遺跡は、中島A・B、大洞、膳棚B(白山)(以上岡谷市) 青木沢、栗木沢、ヨケ、樋口、高山(以上塩尻市)です。

遺物等の水洗い、注記、復元、実測などの整理関係も前年に比して人員を増加して、順調に進んでいます。